

雑詠日記

徐山猿声

卷の三

一九九〇年

市井一人

戯れの雑詠日記も三年となった。心がふと目にとめたことの真実を表現しえてい
るだろうか。その手がかりを書きとめたことで、日常の生活に押し流されることを
一時停止させることができただろうか。雑詠を続けることがこれからも意味を生み
出すだろうか。

三年は一区切りのように感じられる。また新しい旅程を踏み出すことになるのだ
ろう。

正月二日

懐かしい弔問の客年初め

海鳥がにわかに出でて舞上がる岸壁で見る正月の海

正月三日

万両に降る小雪見て雑煮食う

灯籠のかげで万両ねらう鳥

一月九日

松明けて一株の菊雨に立つ

葉の落ちたメタセコイアが一行に霧雨煙る空を縁どる

一月十一日

客人を迎えて冬のおぼろ月

一月十三日

ふる里の海見る空に凧おどる

一月十五日

初月忌を終えれば肩のこる寒さ

わが母に去来するものときれがち心に叶う言葉探して

一月十六日

雲間から条光が照らすかなたへ続くこの道は
前から知っている道 幾度か回帰して

幾度か様々の思いをなした

いつか心が自在に働いて 満ち足りる時が来るだろう

そのとき光が溢れているのはここで

何物にも囚われず わたしは進んでいるだろう

一月二十日

大寒に一輪のばら真紅なり

背を丸め力をこめる冬の床

一月二十三日

風の子が雪舞う畑を駆けていく

山の池雪の降る音水の中

雪しきり鳥ほろほろと山渡る

雪の舞う寒にコスモスすくと立つ

一月二十四日

石段の雪に足跡踊る跡

狒犬も跳び跳ねたげな雪の庭

枯れ草を覆う雪の野白鷺が飛び去るあとを追求め行く

「雪中詠」

窓外の雪景に驚き

山中の寺に浮遊すれば

風は葉上の花を散らし

顧みれば白色の都市

茶を置けば庭に目白が蜜柑食む

二月一日

二月十日

使者来る扉押開け春一番

南風吹き抜けに行けば気は移り降る雨ははや春のやさしさ

二月十一日

昼下がりに書斎の窓に何かがぶつかってきた。見ると目白が脳震盪を起こして震えている。部屋の中の月下美人の葉に休ませてやったら、しばらくすると葉に置土産をして飛んで行った。

わが部屋で夢から覚めた目白去る

二月十六日

梅の香に二月の空は涙する

二月十七日

残月を朝の窓辺に見つつ聴く楽聖の曲心に深く

塀際のすき間の土に生まれ出たたんぽぽの花春を共にす

二月二十二日

白梅に花びら借りて咲いた苔

二月二十三日

糠雨と高きより落つ藪椿

二月二十四日

受験に來た親戚の子を案内して母校に下見に行く。何も知らないなかの少年の日から二十七年が過ぎた。地下鉄で、

ポスターの中の女のつき刺さるそのまなざしと向き合つて立つ

三月三日

菜の花は光の中で己が夢

三月六日

ストーブの燃える音聞く春の夜恋の詩を読む四十五にして

三月十日

春光が供花に渡す蜘蛛の糸

三月十一日

家内中春の嵐に風邪困う

三月十五日

熱高くわがシナプスは脈絡もなくつながつて意識さまよう

三月二十一日

春分の日、風邪の名残のあるまま散歩。例の古墳、千五百年も前のものだろうか、立派な石室の荒廃した塚の上の桜の老木も、沢山の髭のような枝を出して花が咲出した。満開の桜は怪しい雰囲気を出す、今はまだ。

老木の桜おもむろ塚の上

ぶんぶん和李の花が蜂に和す

春分の薄墨の海島没す

三月二十三日

風に聴く地のささやきを花の下

三月二十四日

彼岸まで花を乗せ行く嵐吹く

(亡父の百か日)

三月二十五日

誕生日、映画を見に行く。侯孝賢監督「恋恋風塵」。

風塵と化す思いあり風吹けば風に見つめよその耀きを

眼差しのとどめる記憶塵と化す人よ大地とリズムを刻め

風塵を集めて柳緑なす

三月二十八日

長崎へ出張。

春雨山郷を抱き

緑葉再び生成す

霧の中何処の境にか

桃李の花影を尋ねん

四月二日

山うらら桜と若葉錦織る

四月三日

水面に桜が描く流れ紋

四月八日

葉桜を照らして月が見する

月光も暗愚の身には無量光

四月九日

風塵が野に落ちて咲く連華草

(黄砂)

四月十四日

若葉萌える日向峠も今は雨

灯火のまたたく春の巷には疲れを癒し座る人あり

四月十五日

山腹の果樹園まで散歩。鳥、虫、草花、…春は盛り。

竹鳴って落ちる一葉を陽が射抜く

果樹園の若い緑の木から木へ蝶の短い遍歴の生

四月二十一日

雑踏も春の華やぎ爛熟す

四月二十三日

雨の朝藤の紫地を染める

紅の雪降り積もる道踏む轍

四月二十五日

春老いて眉間のしわを寄す愁い

四月二十六日

『古今集』在原業平の恋歌「月やあらぬ春は昔の春ならぬ…」に誘われて、

いとおしむ春は昔の春ならず心を超えて身の移ろえば

四月二十九日

筍の香り嗅ぐ山かじか鳴く

(親戚中で筍掘り)

五月二日

夕食を共にしながら同行者とイタリア旅行の打ち合わせ。

惜春の夕べそぞろに旅心

五月五日

子供の日娘と巡る映画展『未来へ帰還』大人のうつつ

身を挙げて五月の風を吸う櫂

こともない黄金週間麦熟れる

五月七日

光明を求めて夜の闇に在る白き蛾窓でわたし見つめる

五月九日

鯉はねて緑は深し春行きぬ

五月十二日

上野千鶴子と江里という俳人の対談「俳句に未来なんてあるの?」を読む。

挑戦的な鋭い論にはたじたじとなつてしまう。

雑詠のたわむれ吹き飛ばす知の切れ味

五月十九日

廃虚にも五月の花ローマ遙か

二千年元老院に住む蜥蜴

五月二十日

燦々とオリーブ畑風光る

(列車でローマからナポリへ)

光る野に鋤引く二頭白き牛

五月二十四日

甘きかなふるさと遠い磯の香の

(イスキア島)

五月二十八日

麦熟れるトスカナの丘夢の中

六月一日

雨降って瑞穂の国の屋根ぬめる

六月三日

ぐみの実の渋みわずかに夕まぐれ

六月七日
蛙鳴く田に月にじむ明日は雨

六月八日
わが家の肥後菖蒲・あじさいに、貰った菖蒲が加わって、

すくと立ちこぼれるほどの華やぎを二度まで咲かす菖蒲うらやむ

夜中にうめいていたと家人が言う。どんな夢を見ていたのか憶えていない。

六月九日
凡凡としかも冷たいおまえには悩みは無いかと友人が言う

君知らずや、生きるとは迷うという謂だと。

六月十五日
土砂降りにリズム高らかマンホール (水が溢れてカラカラと)

六月十七日
いなかからの帰途、江守徹の語りでショパンを聞く。

せつなくもサンドとショパンの物語千々の思いをピアノは歌う

六月十八日
梅雨晴れに普請の音のする夕べ

六月二十日

晴れ間得て毛虫の道をよぎる旅

六月二十八日

時の外 朝を寝坊の時計草

雨の中エエイ突っ切って駆けて行け

七月一日

NHKテレビ「銀河宇宙オデッセイ」を見る。
 「自然自身が自然そのもの
 に対して抱く戦慄……」。

雨粒が一つ天から降ってきて

無窮花の花びらを打った

その淡い紫は震えて

雨音の中 静寂の響きを空に返す

飛び散った小さな小さな水玉は

遠い昔まだ氷の塵であった頃のことを思い出す

七月六日

月光の白さ教える梅雨の屋根

七月七日

なめくじが壁に汗する暑い朝

牛飼いの渡る川面を月照らす

七月十日

風誘う日傘の下の白き顔

七月十二日

誘われて急に野北のさる別荘に一泊。

汐風を止める曲線竹の垣

波音は水底深きひとり言

漁火が天と海とを境する時空曲線対峙する我

七月十八日

夏の空切り取る池のアメンボウ

七月二十四日

二羽そろい涼やかに行く白い鷺

新来の小犬と我と留守まもりFM放送聴く暑い宵（チェニーと命名）

七月二十五日

夏山に影なす雲がおもむろに山巒越えて斜面を登る

七月二十六日

同僚・学生と対馬下県郡内院へ。曰く「怪しい探検隊」。

□

船べりに昇る雲見て一千里

（『三國史』東夷倭人伝によれば二千里）

玄海に飛び魚とんで波起てる

潮風の中鬼百合と立つ墓標

墓守の猫は無精に石の影

七月二十七日

波音に目覚めてテント白む朝なお聞き入れば夏の鶯

黒猫に習いテトラに影をとる

盛夏山色深

湾奥風波少

鳶高不動翼

滑空過太陽

何年ぶりのことだろう、素潜りでさざえを採った。M君ダイビングで鰯を仕留める。夕食は豪華な海の幸。

満天の星を眼下に夕涼み

八月一日

考えは堂々巡り逸楽の後の夏の日じりじり過ぎる

「つとめ励むのは不死の境地である」（『ブツダのことば』）

八月二日

花火終わり十日あまりの月残る

八月三日

絵画教室、クラリネットを持つ女性座像に挑戦。モデルは理知的な感じの美人だ。

このように人を見つめたことはない画用紙はまだ模糊としたまま

八月五日

県立美術館で「大アンドレス文明展」を見る。昼食後、侯孝賢監督の映画「悲情城市」を見た。

城の堀蓮のうてなと花の群れ

夾竹桃ゆくりゆくりと昼日中

八月六日

望月の蝕見て涼むバルコニー

八月九日

二見浦海は黄金に夕まだき

八月十日

井戸端に蝉の羽音風もなし

八月十一日

古い歌テレビは流す濡れ縁に夕風待てば虫の音静か

八月十二日

昼寝してまどろみ聞けば路地を行く子等の唱えるナンマンダーブツ

秋兆す夕風空を鷗飛ぶ暑い一日なお惜しみつつ

八月十四日

亡父の初盆なので早朝から盆踊りの櫓を組むのに参加。夜は、妻と娘が盆踊りの手伝い。

幾百か櫓を巡りかかげる手

ヤートコセ幾百年の通夜くどき

それぞれが影と二人の盆踊り

満ち潮に灯籠川を去りかねつ

八月十六日

ふうわりと母の心は事ごとに自在に移る危うさ抱え

八月二十日

小夜更けて高野聖の夢幻譚読めば輪廻は脱け難きかな

八月二十三日

グラス割れ腹立つさまを犬嗤う

八月二十五日

西日射す壁を飛び行く蝶の影

八月二十八日

三好達治の詩は今夜「けれども情緒は」のところ。

秋の夜は・・・

けれども秋は詩を置いて

夜の冷気に耳すます時

九月一日

糸とんぼ窓をすり行くふと気付き見上げる空に思考は停止

九月六日

撞く鐘に虫の音止まず浅き秋

天の恵み枯れあじさいに露を置く

九月八日

小庭に萩一枝の秋の色

九月十一日

ちりぢりに雲の鯛の失せた空

九月十二日

『中国名詩選』、今夜は、昔手習いに書いたことのある張継の「楓橋夜泊」。

秋風生黒雲

滋雨潤草木

山峰擁愁霧

欲改其容色

九月十六日

日曜日。梨・ぶどう・かぼす・柿に萩をあしらつて絵を描く。

画用紙に拙き秋や梨と柿

秋の蚊を絵筆で払うはや夕べ

九月二十日

彼岸の入り田にひこばえの青止まず

九月二十一日

朝刊「折々のうた」に、来嶋靖雄という人の歌「封じたるのちの思ひに悔あれど手紙は言葉過ぎざるがよし」。励まされて、

言い足らずいつも悔やむは我が性と思ひ定めて美しきをとれ

街灯の照らすモダンなビルの壁都市の蛾二匹舞上がり行く

九月二十三日

去年の暮れ老父の逝った病院へ秋の彼岸に縁者を見舞う

□

中唐の人張籍の「秋思」。洛陽城裏見秋風、欲作家書意万重、復恐匆匆說不盡、行人臨發又開封。手紙のことで、意の潔さを歌う人がいれば、情の濃さを吐露する詩がある。

九月二十四日

山の田の朱の額縁は曼珠沙華

九月二十七日

母を連れて篠栗の札所を見物に行く。

霊場は娑婆のにぎわい彼岸過ぎ

秋日和札所を巡る法被達

木々蔽う霊場の滝ほの暗く香煙こめて迷いへ誘う

午睡して老母に帰心また起こる

九月三十日

野分け雨古京の扉に降りしきる

十月一日

音も無く鉄路を濡らし雨は降る大和まほろば行く道煙る

稲穂から雀飛び立つ飛鳥里

曾我川の濁流昔語りせず

弘法の大塔今は人もなし心眼は見ず曼荼羅世界

十月二日

近鉄飛鳥駅に降り立ち、レンタサイクルで明日香の里巡り。高松塚古墳、
聖徳太子伝承地、甘糟の丘、天武・持統夫婦陵。

蛇すくう文武の陵の秋の朝

石舞台葬者いずこに舞い踊る

かまきりも飛ぶいなか道飛鳥寺

小塔に杉落ちかかる秋の暮れ

(室生寺)

室生寺に帰依無きおのこ端座する

朱の橋で水面に落とす長い影室生の川に秋あかね飛ぶ

十月三日

今日も桜井駅から山の辺の道を探索。大神神社、桧原神社、大和神社、永久寺、石上神宮を経て天理駅へ。

山の辺を蝶と道行き柿盛り

山の辺で景行陵への道問えば蛙くわえた蛇が案内

この蛇は三輪の神なり黄金の田

日の道の境は杜の影暗し
(桧原神社)

緑なす廃寺の池の墨流し
(永久寺)

蕉翁の句碑見る廃寺秋桜
(句碑、おとのぎは外様の知らぬ花ざかり)

新旧の社は高くそびえ立つ大和に今も神は賑わう

帰宅。中秋の名月を隠して全天に雲。月下美人の花一輪。

十月九日

秋雨に壁をうごめく蜘蛛独り

「人間が自分自身に与え得るところの、また与えねばならぬところの高い価値は、実に心意によるのであって、単に行為だけによるのではない」カント。

十月十日

体育の日五千メートル競争をたった一人で走る少年

十月十一日

眠られずグラス一杯飲むビール下戸のはらわた熱く煮え立つ

十月十六日

石路のつぶやき一つ露の朝

十月二十日

宿直。『失われた時を求めて』を読む。

午後遅く花瓶の中のコスモスを見つつ漂う時の流れに

真横から秋の夕陽の照りつける部屋の片隅造花は眠る

十月二十一日

秋晴れの日曜の午後キャンパスの桜の梢百舌鳥高く鳴く

桐風に十月の蝉声清し

十月二十四日

夕暮れの煙たなびく秋の野に光の名残こぼれ落ちゆく

十月二十八日

秋寒や杉の根元に鋸入れる

「われわれの旧知の場所は単に空間の世界に属するのみではないのだ。ただわれわれの便宜上、空間の世界に配置するまでのことなのだ。そうしたものは、その当時のわれわれの生活を構成した印象の連続のなかの、わずかに薄い一片にすぎなかったのだ」。『失われた時を求めてI』読了。

十月二十九日

身を花に変えて垣根にホトトギス

十月三十日

夕焼けに新築の棟誇り顔

「塵世難逢開口笑」(杜牧)。せめて、白菊の清澄に瞳を洗おう。

十月三十一日

自由なる心なければただ十三夜

十一月二日

哀調を帯びたサックス響きます空には秋の金色の月

十一月三日

秋の野に草焼く炎ほのぼのと煙立ち行きかりがねと化す

黄昏の空に融け込む雁の列

(雁行する七羽を見た)

十一月五日

学生が休学すると言い出した。

あれこれと語り尽くしてわが言葉が意味を結ばぬ他者というもの

幾匹か犬鳴き交わす夜寒かな

十一月七日

人は愛^{かな}しくも弱きもの秋暮れる

十一月九日

落ち葉踏むけやき通りののもしびが時雨に濡れてやさしい夕べ

十一月十二日

シクラメンの朱を画用紙に盗みかね

惜秋の丘田 青草残り

蟋蟀微かに泣く秋桜の傾くを

鶺鴒飛び立ちて悲心驚く

流水は楓を浮かべて唯清々たり

せきれいの飛び立つあとに咲く野菊

十一月十七日

はげの木は山ふところに酔い痴れて

十一月十八日

出漁の船のエンジン内海にこだまを残すここはふるさと

夕もやが幾つもの山浸しゆく

行く秋は残光赤く空の果て

十一月二十日

窓に寄ってきた蛾に机上の蛍光灯の光が当たって、けし粒ほどの二つの目

が赤く輝いた。その輝きの点に広大な世界が含まれているかのようだ。

冬まじか赤光放つ蛾の瞳

十一月二十二日 小雪にフードの上を迷い蜂

(・・・菊残猶有傲霜枝 一年好景君須記・・・ 蘇軾)

十一月二十六日 歯科医院で左上顎の親知らずの神経を殺す処置。それは、わたしの精神の

一部を殺すことかもしれない。

壊死しつつ歯の神経は断末魔

十一月二十八日 築港のともしび照らす冬の海波のリズムが窓越えて来る

コンサートはねて初冬の暖かい夜道に歌うニューミュージック

十二月一日 夕されば阿蘇の枯れ草赤熱す

十二月二日

雪が来て阿蘇の赤牛山下る

十二月八日

冬光る山の頂すすき原

決闘の島に冬の陽潮止まる

(船島)

十二月九日

街道は雨細き十二月

山稜は朦朧として愈枯淡なり

車灯 霧を照らして名香流る

行人 何ぞ欲するや巷間に帰るを

十二月十三日

暖冬に鴨も気楽な浮遊の身

「われわれは身体としてあり、思惟はいつも表象でしかありえない」

十二月十七日

天下る旅路に雪は融け果てて今は静かに冬の雨音

十二月十八日

寒風に追われて葦辺に身過ぎする者よ

私にも言葉がリズムを持たない日がある

鳴よ、しかしおまえは風に抗して飛ぶことができる

十二月二十一日 かすむ目に行くこの年は替えがなし

年の暮れ常と変わらず星々の光芒はるか時空を渡る

十二月二十二日 酔って寝て醒めて詩に酔う冬至の夜

十二月二十三日 老工の動きに宿る弛み無さ

十二月二十七日 寒菊の足元白し強きかな

十二月二十八日 モノクロの湖面を分かつ空と山

千代の滝また相見てのこの一年

越す先は雨に隠れる暮れの道

一九九一年正月
徐山亭 謹製

「一枝の梅」

三好達治

かつて思っただろうか

つひに これほど忘れ果てると

また思っただろうか

それらの日々を これほどに懐しむと

いまその前に 私はここに踟躕する

一つの幻

ああ 百の蕾 ほのぼのと茜さす

一枝の梅

